

倭館建築に関する復元研究

一対馬民家移築の可能性について

Key Word

倭館 朝鮮通信使
移築 対馬

1 研究概要

1-1 研究背景と目的

今日まで日本と韓国の両国は隣国であり、様々な交流などを結び関係を深めてきた。その歴史的背景や時代を調べると、特に鎖国と呼ばれた江戸時代には朝鮮通信使などが来日するなど、様々な交流が繰り返された。その交流を深めた建物に倭館という日朝通交拠点がある。また、釜山市が押し進める都市再開発にも倭館の復元が項目として入れられている。今回の研究目的としては、この倭館研究を通し、工法や様式などの違いを検証したうえで、実際に日本の民家建築を倭館の復元に再用できるか検証することを目的とする。

1-2 研究方法

- ① 裁判屋では写真等の決定的な資料がないため、情報は参判家・館守家など、*他の倭館建築の復元事例から参考にして復元図を作製する。
- ② 絵図・指図等の史料などを参照し、スタディ模型での復元によって対馬民家と朝鮮民家の屋根形態の検証を行う。
- ③ 朝鮮建築と日本建築の様式などの比較も検証する。
- ④ 木材を使用し、現存に近い状態の模型を作製する。スケールは1/30とし、工法や建築形態を明らかにする。

2 倭館とは

「倭人のための客館」を意味しており、外交公館と貿易の役割を果たしていた。1607年には第一回目の朝鮮通信使が来日し、日本と朝鮮との関係が正式なものとなり、朝鮮政府は日本の使節を受け入れる倭館を新しく陸地に設置した。これが草梁倭館である。草梁倭館は1678年に建設され、1873年に日本の外務省に接収されるまでの200年間存続した倭館で、約10万坪内外の敷地で、その壮大さを知ることができる。対馬藩にとって大きな存在であったと共に日本と朝鮮を繋ぐ架け橋にもなっていた施設であった。

3 既往研究

倭館については、貿易史・制度史・外交史・建築史・都市史などの分野で研究されている。また平面図や絵図・

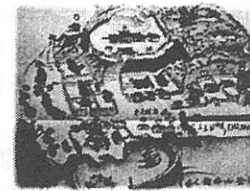


図1 草梁倭館

指図・写真での復元が進められており、倭館建築の実像が解明されつつある。

4 研究の対象

研究の対象は裁判屋とする。数ある倭館の建物の中で、研究の対象として選定した理由は以下の三つである。

- ① 裁判は日本と朝鮮の折衝役であることから、日本と韓国の交流のシンボルになる。
- ② 裁判屋と同類型で対馬民家として今でも現存している。
 - ・対馬には江戸期の民家が多く確認されている。
 - ・裁判屋は対馬民家の増築型である。
 - ・裁判屋と同類型の「永留家住宅」が確認されている。
- ③ 雨森芳州(1668～1755)が二年間裁判役として滞在していた。
 - ・雨森芳州の著書である「交隣提醒」に「誠信」という言葉があり、この誠信は日韓交流の正しい心構えとして着目されている。

4-1 裁判屋の建築概要

裁判屋に関する史料は指図、絵図のみである。平面プランニングでは二つの建物が直角に接合されたL字型形態であり屋根形状は切妻だと考えられる。内部空間は畳敷でトコなどを設置した武家屋敷建築である。しかし屋根工事に朝鮮大工が担当したことにより裁判屋の屋根は朝鮮式となっていた。

表1 研究に用いる資料

裁判屋	倭館のその他の建築
・指図、絵図、平面図 ・裁判屋は対馬民家の増築型 ・「対馬民家」現存、裁判屋と同類型 ・写真等の資料がない為、参判家、館守家などの復元例を参考	・柱等の軸部がそのまま利用 ・東本願寺写真、参判家平面図が明確 ・西館修補記録の参判家の図面がほぼ一致

図2 参判家平面図



K04040 姜昌輝

4-2 永留家住宅について

永留家住宅は対馬の峰町・木坂に現存している。年代的には250年建てており、建築様式は入母屋平入で建築規模としては7間×3間である。屋根は瓦葺き。対馬地方の典型的な民家である。

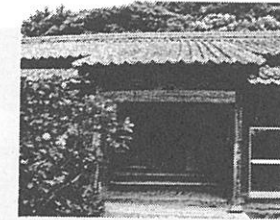


図3 永留家住宅

4-3 朝鮮民家の特徴

当時の朝鮮は地理的にも杉やヒノキなどの良質な材に恵まれていなかった為、大材を加工することができず梁・柱・檼なども自然木を少し加工する程度で用いていた。倭館建築では朝鮮式屋根で建てられていたが、日本と朝鮮の小屋組工法が異なった為、仕様をめぐって衝突は避けられなかった。倭館建築での小屋組は、ソカレという檼を用いていた。このソカレの上に組まれるのがサンチャという瓦下地である。日本では野地板に似ている。また、外観からしても朝鮮民家の入母屋式は、日本の民家と比べて、妻部分が小さい。

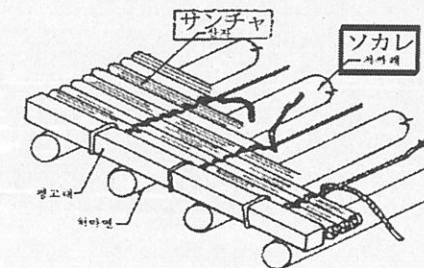


図4 朝鮮屋根の小屋組

4-4 裁判屋・永留家住宅の類似性・問題点

平面図では式台から次之間、本座へと続く空間構成が一致している。

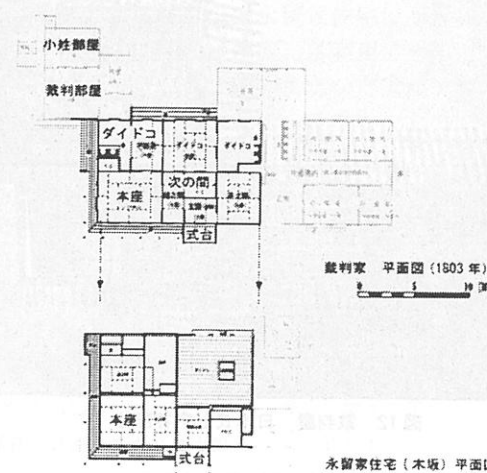


図5 裁判屋・永留家住宅 平面図

しかし、L字型の裁判屋では朝鮮式屋根の小屋組が縁などの位置関係からして、うまく架からないという問題点が出てくる。したがって、この問題点もスタディ模型などを通して検証していく。

なお、スタディ模型はすべて1/50～1/100とする。

5 スタディ模型復元での問題点

内部空間を日本大工が担当し朝鮮大工が朝鮮民家形式の屋根をかけたとなると、どこまでの内部空間の範囲を日本大工が担当し、どこまでを朝鮮大工が屋根をかけたのが問題になってくる。ここでは裁判屋と同類型の永留家住宅の小屋組部分を修正しなおした。またL字型の裁判屋を日本式の小屋組で建て、切妻式の屋根をかけた。これは永留家住宅の小屋組が裁判屋の小屋組に適用するかの検証する為である。朝鮮民家によるスタディ模型も作成したが、これはL字型の裁判屋に入母屋式の屋根がかけられるかを検証する為である。

6 スタディ模型での検証

朝鮮民家の入母屋の場合、妻部分が小さいことがわかった。また、スタディ模型での作業の際に、朝鮮民家の屋根形式はソカレの上にサンチャを引くが、その上に葺土を敷き、そのまた上に「丸瓦」「鬼瓦」「巴瓦」「唐草瓦」「巴唐草瓦」などの瓦がのる。しかしソカレなどは自然のまま、少し加工しただけで、ほぼ原形を留めた形になっており、内部空間は日本大工が建てた日本式になっているが、屋根は朝鮮式のため重さに耐えられるかという問題点が出てくる。これは朝鮮式の小屋組の造りに関しても言えることになる。

また平面図上でも縁の周りを囲む柱が内部との柱とは合っておらず、庇の無い朝鮮民家とは異なっている。今回のスタディ模型で一番の課題点はL字型の屋根のかかり方と小屋組であった。裁判屋の屋根を日本式の切妻で架けて屋根の谷部分などが、どう架かるのかを検証した結果、入母屋の妻側の庇同士で谷が出来るのは良いという結論に至った。また小屋組に関しては朝鮮式の屋根を架ける為、朝鮮式の屋根の重さに耐える小屋組とその小屋組を支える柱等が必要であることがわかる。

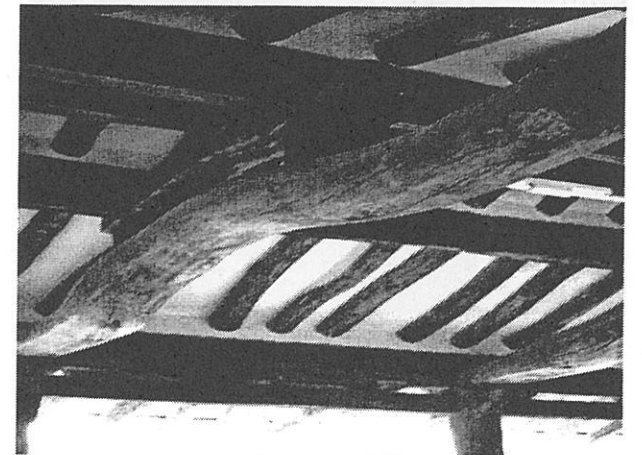


図6 朝鮮民家の小屋組

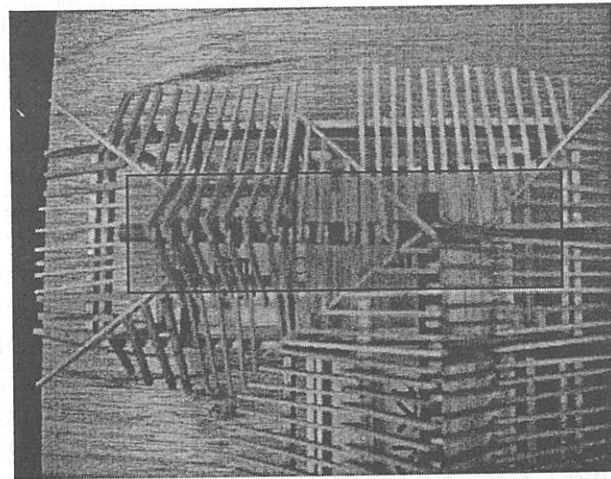


図7 朝鮮民家 L字部分

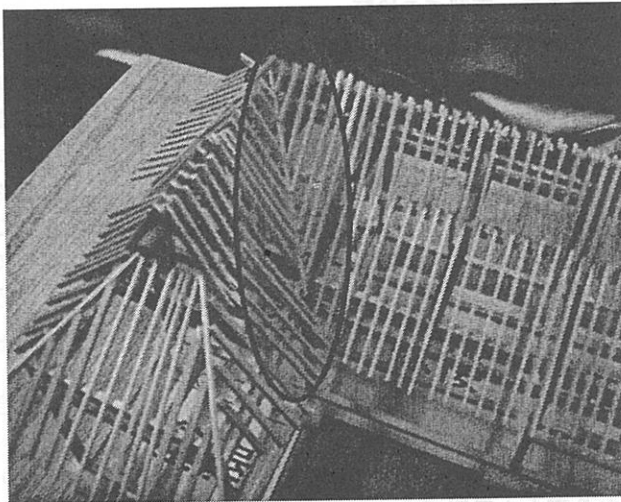


図8 朝鮮民家 谷部分

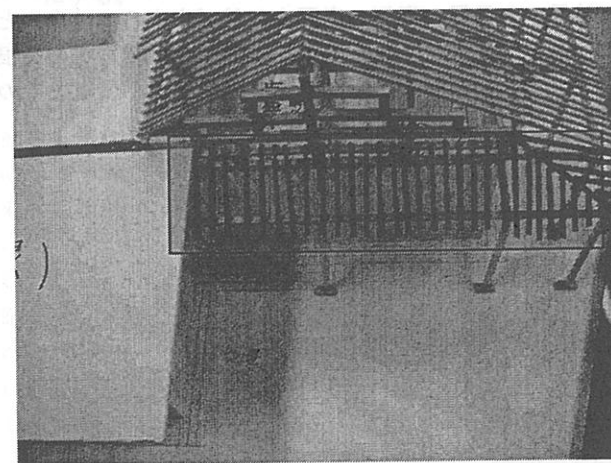


図9 裁判屋 底部分

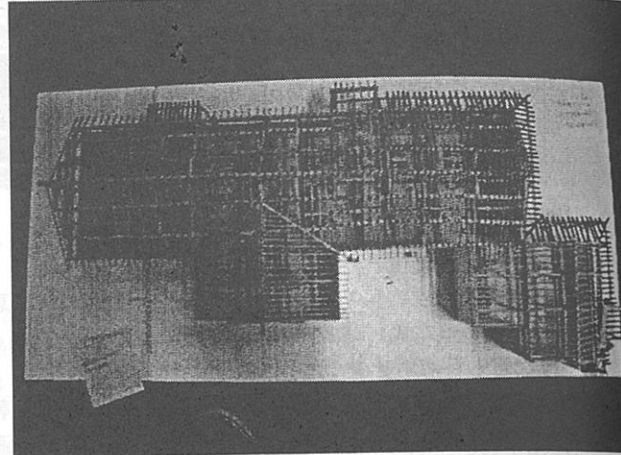


図10 裁判屋スタディ模型全体図

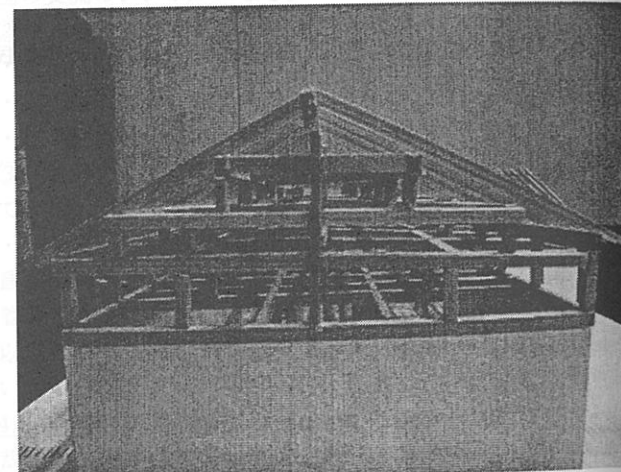


図11 裁判屋 日本式小屋組

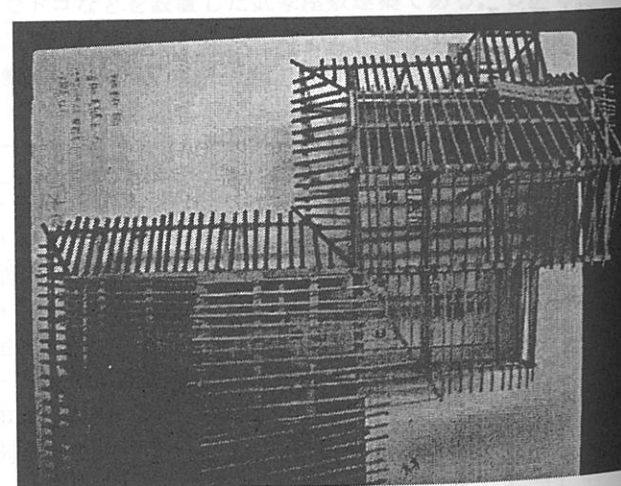


図12 裁判屋 日本式L字谷部分

7 本模型復元での解決策

朝鮮屋根の勾配や木材、瓦等の関係から考えて、屋根形式は入母屋と考える。図4で見て取れるようにL字形態の小姓部屋から裁判部屋・ダイドコ・本座・次の間・式台にかけて縁がつながっている。この縁を覆うためには庇が適正と考える。屋根勾配は朝鮮民家などの文献資料により、朝鮮民家特有の冬季に日が入りやすく夏季には日影をつくりやすいように、28度という勾配を適用する。また内部空間での造りからして、重さを支えるため屋根の小屋組も日本式で、裁判屋の屋根にかかる材料である材木・瓦葺き・瓦・土などは、朝鮮式でかけられたのではないかと考える。

以上の解決策を踏まえ、1/30スケールの裁判屋本模型を復元する。

表2 本模型での問題点と解決策

問題点	解決策
屋根形態	入母屋式
L字形態	縁に庇を適用
屋根勾配	勾配28度
内部空間	小屋組までが日本式

8 まとめ

本研究では、日本民家の永留家住宅が、倭館に建っていた裁判屋として、復元可能かを検証し移築できるかという課題を追求したが、内部空間と屋根形態とで日本式と朝鮮式に別れていた為、移築の際にどのような建築様式になるかを復元模型で検証した。日本大工と朝鮮大工の双方が互いに一つの建築物を建てるにあたって、朝鮮式の屋根をかける際に、勾配・桷(ソカレ)・木材・瓦の重さなどを考慮した結果、日本式の建築内部空間を造っていた日本大工は小屋組までを担当し、朝鮮大工は桷(ソカレ)から上の屋根を朝鮮式によってかけたと考える。このことを踏まえ、裁判屋1/30スケールの復元模型ができた。検証の結果、移築の際に永留家住宅は小屋組までが日本式という形で、裁判屋の復元に利用できるということがわかった。この研究は国をまたいだ遺産モデルと古民家の再生・再利用という面でも意味をなしており、倭館時代に日本大工と朝鮮大工が手を取り合って倭館建築物を造っていたということがわかる。それと同時に倭館時代の建築様式や屋根形態などの、歴史遺産価値の高い復元が期待できるため、今後の日朝交流への一助となることを期待する。

参考文献

- ・「近代アジアにおける歴史的国際交流拠点に関する研究」
夫 学柱 芝浦工業大学修士論文 2000年3月
- ・「近世日朝通交拠点の形成と展開に関する研究」
一草梁倭館の建設と発展プロセスの解明一
夫 学柱 慶応義塾大学博士論文 2007年

- ・「草梁倭館の日韓誠信建築：近世の職人外交と建築技術の混合」
夫 学柱 国際シンポジウム発表原稿 2008年5月2日
- ・「城下町対馬府中と朝鮮通信使迎接に関する研究」
金 佐智子 芝浦工業大学修士論文 2005年3月
- ・「朝鮮の民家」野村孝文 学芸出版社 1981年
- ・「朝鮮半島の建築」中西 章 理工学社 1989年
- ・「韓国の建築—伝統建築編—」著者 金 泰烈、写真 林 正義
訳 西垣 安比古 学芸出版社 1991年6月20日

参照図面

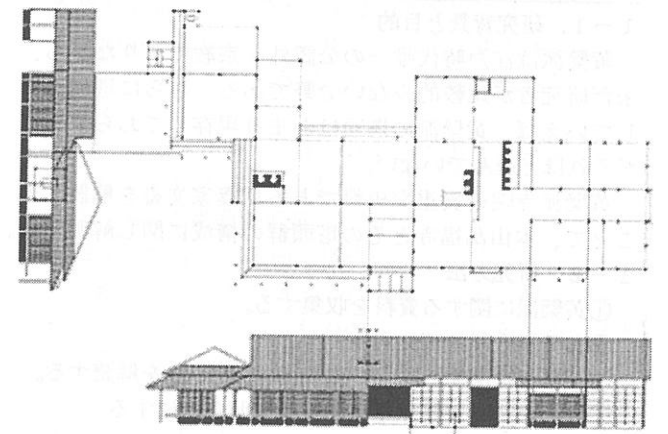


図13 裁判屋平面図・立面図

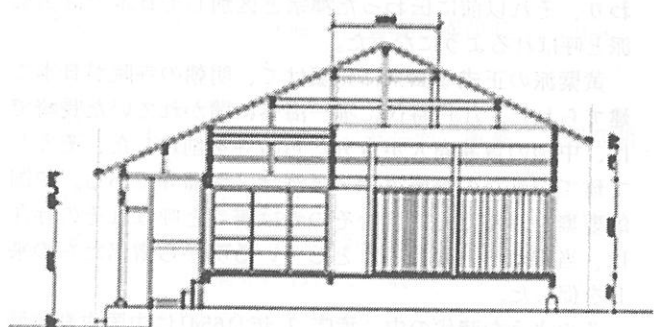


図14 永留家断面図1

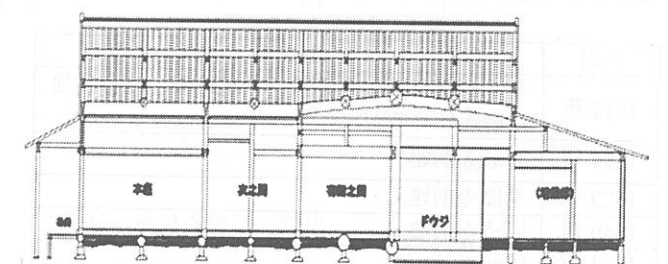


図15 永留家断面図2